

2年度目の「大学史」リレー講義について

佃 隆一郎

〈大学史事務室〉

2006年度秋学期に名古屋（三好）校舎でスタートした、本愛知大学の新科目「大学史」（講義名「総合科目1」）。リレー形式は、2年目の2007年度には豊橋校舎でも開講されるに至り（講義名「大学史」。リレー形式は同様）、当初の“片翼”状態は解消された。

それとともに、両校舎ともに構成・スケジュールを全面的に見直すことにして、初年度と同講義で種々浮かび上がった問題点を是正することに努めた。これによって、2007年度の「大学史」リレー講義は、春学期の豊橋校舎、秋学期の名古屋校舎ともに、以下の構成で行なわれた（カッコ内が担当者、敬称・肩書略。初年度の構成は、『愛知大学史研究』創刊号、26～27ページ参照）。

1. はじめに（佃）
2. 中世ヨーロッパにおける大学の起源
(北嶋繁雄・佃)
3. ドイツにおける近代大学の誕生と展開
(河野眞)
4. アメリカにおける近代大学の展開(太田明)
5. 日本における旧制大学の歩み
(大島隆雄・佃)
6. “本学の前身” 東亜同文書院の歩み
(小崎昌業・佃)
7. 愛知大学キャンパスツアー（佃）
8. 愛知大学、創設の経緯（今泉潤太郎・佃）
9. 戦後の学制改革（田子健）
10. 「愛大事件」とは何か（豊島忠・佃）
11. 薬師岳での山岳部遭難事故(山田義郎・佃)

12. 大学紛争と大学改革（武田信照）
13. 経営体としての愛知大学（堀彰三）
14. まとめとして（黒柳孝夫）

このうち新規の担当者は、河野、今泉、田子、堀、黒柳の各氏であり、河野、太田、今泉、田子、堀各氏の担当分および私の「……キャンパスツアー」が、新規および担当者変更の講義である。当時学長の武田氏および、当時副学長の堀氏（経営担当）と黒柳氏（教学担当）は、それぞれの立場から担当した（ただし秋学期の当該時には学長・副学長とも任期満了となり、堀氏が学長に、太田氏が教学担当副学長にそれぞれ就任）。

なお、私と連名になっている第2、5、6、8、10、11講は、担当各氏（名誉教授および卒業生）をゲストとして招聘した関係によるものであり、実質的には各氏が単独で行ない、私は“現場のコーディネーター”として補助業務を担当した（各ゲストとの連絡は、豊橋および名古屋の教学課——2007年4月まで教務課——が担当）。また、秋学期の名古屋校舎では、一部担当者の都合により、講義の順序を若干入れ替えた。

今回の変更の主な点は、初年度に果たせなかった「豊橋校舎キャンパスツアー」を両校舎ともに実施して（もつとも、豊橋校舎でのものは「ツアー」ではなく「案内」と称すべきであったが）、講義総数の1回分増加（本学全体での変更）に対応したほか、“大学全体の歴史”の分野でアメリカ大学史を追加するとともに、“愛知大学の歴史”の分野で経営体としての側面をクローズアップし

て、初年度よりの講義と調整した。

2006年梓出版社より刊行の『愛知大学小史六十年の歩み』をテキストにしたことには変更はないが、新たに参考資料集として、同じく06年の秋に開催した展示会「愛知大学創成期の群像」で使用した写真パネルをもとにした、同名の写真集（愛知大学東亜同文書院ブックレットの別冊として2007年3月、「あるむ」より刊行。同年同月の卒業式より、同式および入学式時に無料配付）も使用することにし、両書を必ず持参するよう受講者に呼びかけた。受講者の総数は春学期の豊橋校舎（短期大学部を含む）が1年次生のみ88名、秋学期の名古屋校舎が1、2年次生合わせて50名であったが、2年度目の名古屋は初年度（1年

次生のみ137名）より大幅減となった。両校舎での試験の実施内容と結果については、黒柳元副学長が後述する。

以下本号では、今回のリレー講義で新たに構成し実施された各講義（担当者変更分を含む）のうち、河野、田子、黒柳の各氏と私の分を、それぞれの担当者により報告することとする（初年度よりおよび初年度のみ講義の報告は、『愛知大学史研究』創刊号の〔報告の部〕参照。また、2008年3月愛知大学一般教育研究室より刊行された『一般教育論集』第34号収録の、太田明氏の「大学史をどう語るか——大学史講義案(2)——」でも2007年度の「大学史」講義についてふれているので、併せて参照されたい）。